

SOTOKU

崇徳学園同窓会
関東支部
会報
— 第29号 —

発行：崇徳学園同窓会関東支部 編集：支部事務局

〒113-0033 東京都文京区本郷4-37-20

<http://sotokukanto.gl.xrea.com/> [mail:sotoku_kanto@yahoo.co.jp](mailto:sotoku_kanto@yahoo.co.jp)

ホテル機山館
TEL (03) 3812-1211(代) FAX (03) 3816-1218

新しい時代を創造しよう

—幅広い人材教育の母校をみんなで支援しましょう!!—

崇徳学園同窓会関東支部会長 室崎 宏治 (昭和46年卒)

みなさん。こんにちは。最近もっとも近い近況に、「山のあなた」という詩があります。山のあなたの空遠く「幸」住むと人のいふ。臆、われひとと尋めゆきて、涙さしぐみ、かへりきぬ。山のあなたになほ遠く「幸」住むと人のいふ。[カール・ブッセー『詩集』海潮音 上田敏訳 近代文学館版]

いま covid19 (新型コロナウイルス) と言う感染症が流行しています。そして、6月19日より政府により県境を越える移動の自粛も解除されようとしています。いわゆる「新しい生活様式」が提起されています。今一度人類が残した叡智を故人に習って再考が必要でしょう。人類は、これまで、感染症の災厄に繰り返し襲われ、その都度、危機を克服してきました。今私たちが直面している危機も、全世界の人々の協力によってきっと乗り越えることができるはずです。そして、その人々の連携が新しい世界の創造につながるのだと思います。

19世紀と私たちが生きる21世紀は、内容こそ違うものの、科学技術が急速に発展し、人々の暮らしが劇的に変わる文明の転換期という点ではよく似ています。ビッグデータをもとに人工知能(AI)を使って画像診断をする医療技術が登場しました。人手の足りない部分を情報技術やロボティクスによって補い、スマート農業やスマート漁業を創出する。的確な需要予測や気象予測のもとに、多様なエネルギー源によって安定的に電力を供給する。さらには、どこでも手軽に情報を入手でき、家庭やオフィスの多くの作業を遠隔操作できるスマートシティが構想されようとしています。

ただ、ICTは正しいことに使われるとは限りません。わざと間違った情報を流して人々を誤った方向へ誘導したり、個人情報盗んで悪事に利用したりすることも目立って増えています。フェイクニュースが時には一国の命運を左右する場合もあるのです。そのため、各国は機密情報の保持に躍起となり、情報セキュリティの技術向上を目指しています。宇宙工学、海洋探査技術、ロボティクスなども軍事目的に転用が可能です。現代の科学技術は災害の防止など人間の福祉に用いられるばかりでなく、軍事的侵略の目的に利用されるということをしつかりと頭に入れておかねばなりません。

科学技術は本当に人間を幸せにするのか。そう言った問いが今、浮かび上がってきました。もう一度、人間の歩んできた道を振り返り、文明や科学技術がもたらした恩恵の意味を問いながら、幸福で持続的な未来を描かねばなりません。そのためには、人為の及ばない自然の世界を覗いてみるのが大切だと私は思っています

少し自己紹介をしておきます。一昨年第31回総会より黒川 弘会長(昭和33年卒業)より引継ぎしました室崎宏治です。よろしくお願いたします。わたしは中学より崇徳学園にお世話になっておりました。京都大学に進学し、京葉瓦斯株式会社に勤めておりました。この会社は、柔道部が有名です。崇徳の卒業生も沢山います。現在は、登山、絵画、乗馬のトレーニングなどをおこなっております。

さて、数年のあいだに、世界は大きく変貌をとげました。東日本大震災や熊本大地震の復興がままならないうちに、一昨年は北海道胆振東部地震が起き、数多くの台風が日本列島を縦断して、多くの人々が被災しました。世界では民族や宗教による対立が激化し、多くの難民が生み出されて、各国のこれまでの協力体制や連携にひずみが生じています。イギリスの離脱交渉で揺れるEU、一国主義へ傾斜するアメリカ、流動化する東アジア情勢など、こういった世界の急速な動きのなかで、皆さんは何を考え、どういった決意を新たにしてきたのでしょうか。

生命に関する考え方も大きく変わりました。一昨年は中国でゲノム編集による双子が誕生し、デザイナーベビーに向けて生命倫理に関する議論が白熱しています。昨年より入ってゲノム編集によるサルのコロンも誕生しました。日本でもiPS細胞やES細胞を用いた医療技術が急速に進展し、人の臓器がブタの体内で作成される時代になりました。生命環境や人間観をめぐるさまざまな倫理的問題が浮上してきています。そこには、単に病気を治すというだけでなく、人間の命の始まりや遺伝的なシナリオに手を加えるという可能性が広く開けているからです。それは、社会の年齢構成や人生計画を大きく左右して、未来社会の動態に影響を与えます。また、医療がビジネスと結びつき、バイオベンチャーとして巨大な富を生み出し、世界の経済を動かす動因にもなりつつあります。私たちは今こそ、さまざまな生命の長大な歴史を振り返りつつ、生物としての人間、文化を持つ社会的な存在としての人間を総合的に見つめなおさなければなりません。

これからの社会は、Society 5.0 と呼ばれる超スマート社会です。そこでは ICT 機器が威力を発揮して人々や物をつなぎ、ロボッ

トやAIが多くの仕事を代替することになって、互いの顔が見えなくなるかもしれません。しかし、そういった社会でこそ、人々が触れ合い、生きる力を発揮して世界と向き合うことが大切になると思います。世界は資本集約型や労働力集約型から知識集約型社会に変貌しようとしています。日本も東京一極集中型の経済から地域分散型の経済へと脱皮しようとしています。その動きを作るのは今からの課題と皆さんの力です。

これからの社会は、これまでにはない人間観や自然観が必要です。先端的な科学技術にすべてを依存するのではなく、これまで時代遅れと見られてきた考え方を拾い集めて未来を見つめ直すことも重要になるでしょう。温故知新、ふるきをたずねて新しきを知ることは、ますます必要とされています。現代は情報技術やコミュニケーション技術が急速に発展し、いつでもどこでも、簡単に既存の知識にアクセスできるようになりました。膨大な映像が情報機器を通じて無料で流され、もはや、書物は知識を得る唯一無二の手段ではなくなりました。しかし、社会を先導するイノベーションには科学技術だけでなく、人文学、社会科学的な学知と共に確かな人間観が不可欠であり、それを総合的な学術研究の蓄積から見直さなくてはなりません。

現代の問題は、「将来は現在より良くなるはず」という希望を支える資本主義の原則、すなわち「経済成長は至高の善」という理念が崩れ始めているということでしょう。私が京都大学の学生だった1970年代初頭はまだ日本が高度成長時代で、すぐ先に明るい未来が見えているような気がしていました。大阪で万国博覧会が開かれ、科学技術によって次々に新しい可能性が切り開かれようとしていることが実感できました。しかし、やがて公害問題や温暖化などの環境劣化が地球規模で急速に進んでいることが明らかになりました。その後、「持続的な開発」が謳われ、地球の劣化を防ぐための国際協約がいくつもできました。地球の資源は有限であり、人間が発展する道には限界があることが共通理念となったのです。日本の産業界もパリ協定で謳われたSDGs（持続可能な開発目標）を基に企業倫理や戦略を掲げるようになりました。これからの社会には、地球規模で生物多様性や人間社会を包摂的にとらえる思考方法が不可欠になります。

崇徳学園には創造の精神を尊ぶ伝統があります。まだ誰もやったことのない未知の境地を切り開くことこそが、崇徳学園の誇るべきチャレンジ精神です。皆さんのなかにもさまざまな突出する能力を身に着け、すでにそれを発揮して活躍している方が多いだろうと思います。しかし、忘れてはならないのは、自分と考えの違う人の意見をしっかりと聞くことです。しかも複数の人の意見を踏まえ、直面している課題に最終的に自分の判断を下して立ち向かうことが必要です。

しかし、現代社会ではこの調和が崩れ、多様な考えを持つ人々の共存が危うくなっているのも事実です。皆さんもこれからの人生でこの難題に直面する事態に出会うことでしょう。そのとき、崇徳学園の自由な討論の精神を発揮して、果敢に自らの課題に向き合ってほしいと思います。皆さんがこれから示すふるまいや行動は、崇徳学園同窓会の一員として世間の注目を浴び、皆さんの後に続く在校生たちの指針となるでしょう。これから皆さんの進む道はさまざまに分かれていきます。しかし、将来どこかで再び交差することがあるはずで、そのときに、崇徳学園の卒業生として誇れる出会いをしていただけることを私は切に願っております。

現代は国際化の時代といわれます。皆さんの将来活躍する舞台も、日本という国を大きく越えて世界に広がっています。地球社会の調和ある共存のために、解決すべき課題がたくさんあります。自然資源に乏しいわが国は先端的な科学技術で人々の暮らしを豊かにする機器を開発し、次々にそれを世界へと送り出してきました。海外へと進出する日本の企業や、海外で働く日本人は近年急激に増加し、日本の企業や日本で働く外国人の数もうなぎのぼりに増加しています。皆さんがその流れに身を投じる日がやがてやってくると思います。そのためには、日本はもちろんのこと、諸外国の自然や文化の歴史に通じ、相手に応じて自在に話題を展開できる広い教養と、常識を疑いつつ真理を追求する気概を身につけておかねばなりません。理系の学問を修めて技術畑に就職しても、国際的な交渉のなかで多様な文系の知識が必要になるし、文系の職に理系の知識が必要な場合も多々あります。世界や日本の歴史にも通じ、有識者たりうる質の高い知識を持っていなければ、国際的な舞台でリーダーシップを発揮できません。学校の学びだけではない、海外の文化や自然を自ら体得するフィールドワーク的な企画です。海外の多様な人々との対話を通じて、新しい学びの場で世界に貢献できる独創的な能力を育てていくことが必要だと思っています。

世界は今、資源集約型社会、労働力集約型社会から知識集約型社会へと変貌を遂げようとしています。そこでは情報が大きな価値を持ち、情報通信技術や人工知能（AI）が大きな力を発揮するでしょう。病気の早期診断や新しい薬の開発にすでにこうした技術が応用されています。膨大なデータからAIが病因を見つけ出し、適切な治療法を考案して適用し、やがて医療ロボットが的確で安全な手術を行うようになるでしょう。京都大学の山中伸弥先生のiPS細胞研究所では、iPS細胞を利用してさまざまな新薬の開発や治療方法の創出を実現しています。栄養価が高く、安全で収量の多い栽培植物や、成長が早く美味しい肉の生産にもこれらの技術が役立っています。自動運転を可能にするドライバーモニタリングシステムやスマートシティセンシング、カメラとAIを用いた商品識別技術、多言語自動翻訳技術、災害情報分析技術など、新しい技術が次々に生み出されています。それは私たちの暮らしを大きく変えるでしょう。2045年にAIが人間の脳を超えるシンギュラリティ（技術的特異点）の到達を予測す



る議論さえ行われています。

145年の歴史を持つ崇徳学園は、新しい校舎も建設が出来、ハード面で新しく女子学生も入れる体制ができ、2020年4月より特別進学コースから受け入れを始め、2021年度から中学も含め全面的に共学になるそうです。これからの女性にも多いに期待できる所です。又、スポーツも期待できます。

7月4日(土曜日)の12時からの機山館での関東支部総会は延期になりましたが(現在は開催未定)で盛大に盛り上がりましょう。
【covid19(新型コロナウイルス)については、京都大学IPS研究所山中伸弥さんのホームページに詳しく紹介されています。】

男女共学を開始

崇徳学園理事長 **奥田 耕造**(昭和40年卒)

今年はコロナ禍で、第33回崇徳学園同窓会関東支部総会が延期となり、皆さまのお元気な姿を拝見することが出来なく残念に思います。

ウィルス感染拡大は何とか鎮まってきましたが、まだまだ安心はできません。コロナウィルスの特徴は、特に高齢者に容赦なく襲い掛かってくることです。老若男女の皆さん、ワクチンが出来るまでは正しく怖がってコロナを寄せ付けしないで下さい。

学園の近況を報告します。創立145年目となる本年4月、高校の特別進学コースから男女共学を開始しました。

施設面では、皆さんから沢山のご寄付を頂き立派な学び舎が出来上がり、おかげさまで最高の教育環境が整いました。教室では、私語も無く熱心に授業が行われ、終了チャイムが鳴っても数分間は先生の周りに質問する生徒が集まっています。

来年度は、中学校、高校進学コースの共学を始めます。女子生徒の増加に伴い、崇徳学園の改革に向けた新たな挑戦を、大胆かつ繊細に行ってまいります。

5年後の建学150年目には、新たな崇徳学園を皆様に見て頂ける様にしたいと思います。

また、崇徳学園から車で約15分程度の場所に、課外活動に必要な総合グラウンドを確保しました。永年の課題であったクラブ活動場所が強化されました。

これらによって学園力は少しずつですが増して行きます。学力、スポーツ、文化あらゆる部門で、生徒一人一人が目標にチャレンジし、更に輝くことができる学校にして行きたいと思えます。

しかし、まだまだ崇徳学園は、改善・改革があらゆる分野で求められています。今後も建学の精神を継承する中で、皆様のご理解ご支援を頂きながら、崇徳学園の更なる発展に尽力して参りたいと思っています。今後とも宜しくお願い致します。

新たな一歩

崇徳中学校・高等学校 校長 **高木 哲典**(昭和56年卒)

崇徳学園同窓会関東支部の皆さまをはじめ、全国でご活躍の同窓の皆さまよりご支援を賜っておりますこと、心より感謝申し上げます。

今年は、新型コロナウイルス感染症が流行し、全国に非常事態宣言が発令されるという過去に例を見ない事態が起きました。本校におきましても感染拡大防止のため、生徒の健康と安全を第一に考え、休業措置をとりました。この度の新型コロナウイルス感染症によりお亡くなりになられた方々にお悔やみ申し上げますとともに、罹患されている方々にお見舞い申し上げます。医療従事者の方々は勿論のこと、それぞれの立場で懸命に対応努力してくださっている皆さまに、心から敬意と感謝の意を表します。

このような昨今、多くの同窓の皆さまも先の見えない不安の中での生活を強いられておられると思います。先行きが不透明で、どこを見ても不安なことばかりです。このような現実に直面して、これまでの日常生活が「当たり前」ではなく「有り難い」ことであったことに気づかされたのではないのでしょうか。同窓であることは有り難いことで、様々な人との出会いの中で、本学園の同窓であることが分かれば、その瞬間からお互いの距離がぐっと縮んでいくように感じます。有り難いことです。このような時だからこそ、同窓である私たちが、支え合い、助け合い、その輪を広げていくことが大切なことだと改めて感じているところです。

先日、平成16年卒業の田中慎太郎さんより、本学園を想い、学校生活に戻りたくても我慢している生徒たち、日々頑張っている教職員へポジティブな気持ちを届けたいということで、1万枚のマスクの寄贈を頂きました。母校の生徒や教職員に対する田中さんの篤き思いを受け取るとともに、1枚のマスクの重さを実感しました。このように崇徳の建学の精神を大切にされ、社会でご活躍の卒業生がたくさんおられることを改めて誇りに思いました。

ところで、今年度は、中学校58名、高校461名の新生を迎えました。4月7日の高校の入学式では、女子生徒一期生を迎えることができ、男女共学として新たな一歩を踏み出しました。今年度は、高校特別進学コースのみの共学のため、特別進学コース129名中、57名の女子生徒を迎えてスタートしました。新たなスーツスタイルの制服に袖を通し、崇徳生として生活を送る女子生徒を含めた新生を見るにつけ、感慨深いものがあります。新型コロナウイルス感染症の感染拡大防止のため、規模縮小、時間短縮をしましたが、入学式を無事に行うことができたことを有り難く思っています。しかし、やっと新たな生活が始まった矢先の休業措置でしたからとても残念でした。現在は平常の授業を行っております。このようなときだからこそ、縁あって崇徳に入学した

生徒を、皆で支え、成長させ、一人ひとり輝かせるという重責を改めて感じているところです。

生徒の様子を回顧すると、様々な場面において活躍し、一人ひとりが自分らしく輝いたと思います。進学実績とクラブ活動実績について、その一端をお知らせします。進学実績におきましては、3月に卒業した389名と既卒者の大学合格状況は、国公立大学に47名の合格者を出し、主な大学としては東北大学1名、九州大学1名、広島大学4名、筑波大学2名などとなっております。私立大学は、慶應義塾大学2名、早稲田大学2名、GMARCH17名、関関同立58名、また教育連携校である龍谷大学には35名合格しました。地元大学志向が続いている中、広島修道大学、広島工業大学、広島経済大学、広島国際大学などにも多数の合格者を出しました。

クラブ活動においては、中学・高校ともよく頑張ったと思います。全国大会出場、入賞という大きな目標を掲げて達成したクラブ、また、大きな大会でなくても、地道な活動に取り組んだクラブも充実した1年であったと思います。高校のインターハイでは、バレーボール、柔道、ボクシング、体操競技、陸上競技、自転車競技の6競技が出場しました。また、国民体育大会には、バレーボール、ボクシング、陸上競技、自転車競技の4競技が出場しました。中でもボクシングは、フライ級とウェルター級の2階級で優勝しました。軟式野球部は、第64回全国高等学校軟式野球選手権大会で第2位となりました。春に行われる予定であった全国選抜大会には、柔道、ボクシング、体操競技、自転車競技の4競技が出場することになっていましたが、新型コロナウイルス感染症のため大会が中止となり、残念な思いをいたしました。また、文化部においては、新聞やインターアクトが全国高校総合文化祭に出場しました。さらに中学校では、全国中学校体育大会に柔道と剣道が出場し、柔道個人90Kg超級で2位、90Kg級で5位となりました。

各クラブがこのように大会で活躍することができましたのも、同窓の皆さまの応援が生徒の励みとなったからです。クラブ活動に対しまして多面から支えて頂きましたこと心からお礼申しあげます。今年はインターハイや甲子園など全国大会が中止になり選手たちには残念な夏となりましたが、代替大会が広島県で検討されています。その大会に向けて有終の美を飾るべく、頑張りを続けております。これからも引き続き温かなご声援賜りますようよろしくお願い致します。

最後になりますが、本学園が教育の根幹としている「親鸞聖人のみ教を根幹に据えた人を育てる心の教育」を具現化させ、「感謝の心」と「思いやりの心」を育み、その上で、勉強やクラブ活動などに精一杯励むことができる生徒を育て、一人ひとりが自分らしく輝いていけるよう私たち教職員も精進して参ります。同窓の皆さまにおかれましても、母校の生徒の頑張る姿に期待していただき、より一層のご支援を賜りますようお願い申しあげて、ごあいさつとさせていただきます。

崇徳出身者の絆を深めよう!!

崇徳学園同窓会会長 松田 宜久 (昭和61年卒)

母校同窓会関東支部の皆様、平素は同窓会活動に何かとご理解ご協力を賜り誠にありがとうございます。また昨年9月7日にホテルグランヴィア広島にて令和元年度同窓会総会・懇親会を開催致しましたところ、室崎会長はじめ関東支部役員の皆様にはご遠方よりご来場を賜り改めて深く御礼申し上げます。私は昨年9月7日の総会にて承認され令和2年4月より崇徳学園同窓会会長に就任致しました昭和61年卒の松田 宜久(マツダヨシヒサ)と申します、どうぞ宜しくお願い致します。コロナ禍により皆様におかれましても様々な支障が生じられ、生活に影響受けられている皆様には心よりお見舞い申し上げます。今後は新たな生活様式を実践しながら、第2波、第3波にも備えなければなりません。今、普通に生活できることがいかに有り難いことかと痛感しています。新型コロナウイルスの感染症の終息を願うばかりです。

母校崇徳学園は3年をかけ新校舎の建築と本館リニューアル工事も無事終わり2020年度からは女子生徒を迎え男女共学となりました。しかし崇徳学園もコロナ感染症の感染拡大防止のための臨時休業等の措置を取らざるを得ない状況となりました。今後は自宅に居ながらオンライン授業等受けれる環境づくりも視野に入れていながら教育の遅れが出ないようにやっていく必要性も感じます。そうした中、同窓生よりデジタルサイネージ、マスク等のご寄付等いただき大変ありがたく思っています。

本学園同窓会は「徳を尊び、思いやりの心を起こす」という「崇徳興仁」の精神で、歴代の会長、役員の方々が築いてこられた「顔の見える同窓会」として、学園主要行事への参加や毎年恒例となった崇徳祭の店に加え、PTA役員との懇親会を開催しながら今後の後輩達の活躍に支援していきたいと存じます。

私自身、社会に出て様々な場面で「崇徳出身なのか」から始まり崇徳を縁とする結びつきの出会いをいただき同窓であればこそ喜びを沢山実感させて頂きました。

崇徳学園出身同士、クラブ・職域・学年・商売等で関係を親密にし、こういう時だからこそ同窓生同士の交誼を厚くして絆をもっともっと深めていただくよう願っています。

より一層広がる同窓の輪を目指し皆様方からのご意見やご要望をできる限り同窓会に反映させ、後輩達の今後の活躍を支援してまいりたいと存じます。

関東支部の皆様のご多幸を祈念しご挨拶とさせていただきます

崇徳学園で学んだこと

—新型コロナウイルス感染拡大を目の当たりにして思うこと—

崇徳学園同窓会関東支部幹事 竹村 将志 (平成15年卒)

1. 初めまして。平成 15 年卒業の竹村将志と申します。

早稲田大学法学部への進学を機に東京へ上京し、早 16 年。現在は、東京都武蔵野市にある吉祥寺という街で弁護士をやっております。良くも悪くも、東京での生活にすっかり慣れてしまい、広島弁で熱く語り合うという機会は激減してしまいました。今では、帰省の度に広島駅で購入しているカープのマグカップを事務所のデスクに置くことで、広島を感じ、広島県民であること噛みしめながら、毎日を過ごしています。

そのような中、昨年、崇徳学園同窓会関東支部の総会に参加させていただき、諸先輩方とご挨拶をさせていただきました。そして、これをご縁とばかりに気をよくした私は、その後、幹事会にまで顔を出させていただき、挙句の果てには、このように執筆の機会まで頂戴してしまいました。そういう訳で、諸先輩方のご厚意に甘える形で、このように筆を執らせていただいた次第でございます。

2. 私は、崇徳中学校入学から崇徳高等学校卒業までの 6 年間で崇徳学園で過ごしました。両親の協力のもと、実家のある安芸高田市吉田町という小さな町から、毎朝 6 時 10 分のバスに乗り、片道約 1 時間半かけて通学していました。今思うと、よく通ったものだと我ながら感心したりもしますが、実際に 6 年間通ってみて分かったことは、少ないながらも、毎年数人程度は県北から通う「同士」達がいるということでした。おそらく、今も同じ経験をしている後輩たちがいてくれるのだらうと思います。決して楽なことではありませんが、その価値は十二分にあるので最後まで通いきってもらいたいと願うばかりです。

当時は思春期真っただ中であつたことも相俟って、日々直面する出来事はどれをとっても新鮮で刺激的なものばかりでした。県北から街中に出てくる私にとっては、尚更で、まさに心境としては「お上りさん」そのものだったように思います。

崇徳学園で過ごした 6 年間を通じて、本当に多くのことを学ぶことができました。先生方や友人らと過ごした濃密な時間は私にとっての財産であり、人格形成の基礎となっていることは間違いありません。

そして、卒業後、年を重ねてくると、これまでとは別のものが見えてき始めたように思います。つまり、今、改めて崇徳時代の経験を振り返ってみると、宗教の授業を通じて学んだことが大きな財産になっていると実感することが年々増えてきたのです。

3. お釈迦様の生誕や、お釈迦様が悟りを開くまでの逸話等、興味深いテーマは複数ありますが、その中でも、特に「私たちは生かされている存在なのだ」という教えに関しては、その意味を実感することが多々あります。

世の中のあらゆるものは、全てがお互いに影響を与えあって存在しており、絶妙なバランスのうえに成り立っているところ、その意味では、自分という存在は主体的な自己として存在するものではなく、互いの関係のなかで「生かされている」存在にすぎないのだというのが、その概要であつたと私は記憶しています（万が一、間違っていたら申し訳ありません。）。

4. 昨今、日本のみならず、世界規模で新型コロナウイルスの感染拡大が深刻化していますが、このような状況においては、より一層、私たちが「生かされている存在なのだ」ということを実感します。

未だにマスクは全国的に入手困難であり、東京都ではトイレトペーパーも入手困難の状況が続いています。これら日用品一つをとっても、ひとたび需要と供給のバランスが崩れてしまうと、我々の日常生活は激変してしまいます。脆い。どうしても、そう感じざるを得ません。これだけ人と物に溢れ、便利な生活を送れる環境が十分に整っているはずなのに、バランスが崩れてしまうと、無力そのものです。

新型コロナウイルス感染拡大の影響は、法曹界にも及んでいます。緊急事態宣言が出されたことを受け、東京地方裁判所、東京家庭裁判及び東京都内の各簡易裁判所は、令和 2 年 4 月 7 日から同年 5 月 6 日までに予定されていた裁判期日を次回期日未定のまま原則全て取り消しとしました。弁護士会においても各種委員会活動等は軒並み休会となっており、通常の弁護士会活動の全部または一部が制限されるなど、その影響は多岐に渡ります。言わずもがな、このような事態は極めて稀です。正直なところ、新型コロナウイルス感染拡大がここまでの大事になるとは思ってもみなかったというのが本音でもあります。

崇徳学園関東支部 役員名簿

名誉顧問	岩部金吾_S24、黒川 弘_S33
顧問	西村克哉_S16、瀧口裕行_S29
会長	室崎宏治_S46
副会長	柄林範邦_S37、善本正教_S38 (代表幹事)、浅邊 正_S40、幸田俊三_S44、藤井康司_S51、重本康成_S48 (事務総括)
監査	重元喜彦_S36
幹事	上村 彰_S42、占部正夫_S44、國本 実_S48、津川博光_S49、山中英嗣_S50、畠 繁明_S50、榊田基裕_S52、上平義治_S54、光若由啓_S54、田村 淳_S55、大瀬戸浩彰_H6、出水伸享_H7、小川喜之_H7、竹村将志_H15、新見晃司_H18

しかし、このような状況になってみて、改めて「当たり前なこと」など存在しないと痛感するのです。

日々、当たり前に行っていることは、日常生活面での事項か、仕事面での事項かを問わず、それらすべてが貴重な一瞬一瞬の積み重ねなのだと思います。そして、貴重な一瞬一瞬を積み重ねることができるのは、まぎれもなく、「身の回りの誰か」や「まだ見ぬ誰か」の努力や尽力のおかげなのであり、それこそが、私たちが「生かされている」ということの証左なのではないでしょうか。5. 他方で、上記の理屈でいえば、微力ではあるものの、私自身も「身の回りの誰か」や「まだ見ぬ誰か」の日々の生活等を支えている、または、支えているかもしれないということになります。

そうすると、私自身もそういった誰かの助けになりたいという思いが自然と生じるとともに、少なくともマイナスの影響は与えないで生きていきたいという思いも生じてきます。そして、これこそ、マスクやトイレットペーパーといった物資の買い占め問題等につき、自分はどういう態度を取るべきなのかという点に関する行為規範そのものだといえます。「ステイホーム」の合言葉のもと要請されている在宅勤務や外出自粛に対する自身の態度決定についても同様です。

とは言え、恥ずかしながら、このような緊急事態に陥って初めて、上記の点につき、ここまでの現実味を持って考えられるようになったというのが正直なところ。甚だ遅きに失するというほかありません。だからこそ、これまでの遅れを取り戻すべく、月並みではありますが、一日一日を大切に過ごしたいと思っております。

まずは、「当たり前だと思っていることを当たり前継続できること」がどれだけ貴重なことなのかを自覚する必要があるでしょう。また、自分が「当たり前」だと思っているそのこと自体が決して当たり前などではないということも自覚することも必要でしょう。そして、そのような恵まれた環境に身を置くことができていることに感謝することこそが、我々の日々の暮らしをより豊かなものにする第一歩へと繋がっていくのだと思います。それは同時に、我々が今現実直面に直面している緊急事態を乗り越えるための重要な要素となるのではないのでしょうか。私にはそのように思えてなりません。なぜなら、私たちは「生かされている存在」なのだから。

ゴルフ部近況報告

崇徳高校ゴルフ部顧問 藤木 亮

ゴルフ部は現在、1年生が1名、2年生が1名の計2名で活動しています。今年度は部員数が少ない上に、2年生は特進クラスに所属していることもあり、限られた時間の中で随時工夫をしながら練習を行っています。

普段は三滝ゴルフセンターで練習を行っていますが、2019年度の後半からは崇徳高校のOBでもある上野展之プロにお願いして、月に1度のペースでレッスンをしていただいています。レッスンの中で与えられた課題を1ヶ月かけて練習していき、技術のさらなる向上を目指します。また毎週月曜日には、新校舎の角田ホールで縄跳びや体幹トレーニングなどに取り組み、ゴルフに必要な筋力・基礎体力を作っています。

今年度は大会出場の実績はありませんが、年に3回の県大会と中国大会に参加できるよう、これからも技術を磨いていきたいと考えています。

ボクシング部近況報告

崇徳高校ボクシング部顧問 信本 巖

ボクシング部は2020年度現在、10人が所属しており、第二体育館2階のボクシング道場で活動しています。毎日の練習は、約3時間、ジムワークとして、縄跳び、シャドーボクシング、ミット打ちやサンドバッグ打ち、マスボクシング（パンチを当てないスパーリング）などをして、その後、大芝ランニングコースで土手を1周するなどのロードワークをしています。

部では「ボクシングが強くなるのではなく、ボクシングで強くなる」ことをモットーとし、単純にボクシングが強くなるための技術指導ではなく、ボクシングを通してさまざまな力を身につけられるような指導を心がけています。同窓会のみなさまの有形無形のご支援のおかげで、近年では、インターハイでの個人優勝や学校対抗の部第2位、全国選抜大会や国体での個人優勝など、全国的に活躍できています。これからもボクシングを通して生徒が輝けるよう精進して参りたいと思いますので、応援よろしく願いいたします。

.....
7月4日の崇徳学園同窓会関東支部同窓会の総会・懇親会が延期となりました。
新型コロナウィルスが終息しました折には、総会開催を改めてご案内させていただきます。
皆様のご健康をお祈り申し上げます。
.....